

平成 27 年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

所属	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野	職名	博士後期課程 3 年	助成金額	30 万円
氏名	本多 由起子 印	メール アドレス	honda.yukiko.27m@st.kyoto-u.ac.jp		
研究課題（申請書に記入した内容を記入すること。）					
保護者の孤立が子どもの発達に与える影響					
助成金使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。）					
<p>【背景】 日本では、人口の都市集中とそれに伴う古くからの地域共同体の解体、さらに核家族化・少子化という大きな社会変化を背景として、乳幼児を養育している家庭の孤立が危惧されている。このような子育て上の孤立を防ぐことを目的とした政府事業例として、厚生労働省が平成 19 年より施行している「乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）」がある。本事業では生後 4 ヶ月までの乳児がいる全ての家庭を対象として訪問することを目指しているが、現時点では原則として産後 1 回のみでの訪問である。さらにその後に続く連続した支援に資するために、具体的にどのような家庭が孤立しているのか、また保護者の孤立が子どもの発達とどのような関連があるのかにつき、明確にしておく必要がある。</p> <p>【研究内容】 本研究では厚生労働省の 21 世紀出生児縦断調査のデータを用いて下記の解析を行った。21 世紀出生児縦断調査とは、2001 年 1 月と 7 月の特定週に出生した約 5 万人の子ども世帯に対する調査である (www.mhlw.go.jp/toukei/list/27-9.html、閲覧日 2015 年 11 月 30 日)。この調査データを用いて下記 2 点の研究課題につき検証した。</p> <p>① 保護者の「孤立」に焦点をあて、実際にどのような保護者が孤立しているのか、その背景要因の検討 ② 保護者の「孤立」と子どもの発達（問題行動・生活習慣など）との関連</p> <p>① 保護者の「孤立」と関連が見られた背景要因 分析の結果、低学歴、無職またはパート雇用、未婚の母、子どもが産まれて嬉しくない、夫の育児への協力が得られない、などの要因において子育てにおける「孤立」との関連がみられた。</p> <p>② 保護者の孤立と子どもの発達との関連 孤立した保護者と孤立していない保護者を比較して、子どもの生活習慣（3 歳時点での歯磨き習慣や規則正しい睡眠習慣）や発達（5 歳半における自分をうまく表現できるや一つのことに集中できるなど）との関連を検証した。分析の結果、歯磨きの習慣が身につけていない (OR=1.67, 95%CI=1.21, 2.28)、落ち着いて話を聞けない (OR=1.59, 95%CI=1.16, 2.18)、一つのことに集中できない (OR=1.59, 95%CI=1.12, 2.55) といった各要因において、孤立した保護者の子どものオッズ比がそうでない保護者の子どもよりも高かった。この段階では交絡因子として学歴・雇用状況・兄弟数等を調整しているが、あくまで仮分析の結果であるため、今後分析についてより精緻化していく必要がある。</p>					
助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合は URL を記載すること。）					
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)		
発表準備中					